

浄土

monthly JODO

2019
December

12



貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



写真の歴史を簡単に振り返ってみる。小さな穴を通った光が、壁に外の景色を映し出すことはよく知られていた。この現象を利用して一五世紀にカメラ・オブスキュラが作られるが、これはフィルムがない装置で、ピンホールの反対側に置かれたすりガラスに景色を映し出す。ヨーロッパの画家たちは映った景色をなぞって写生に役立てたりしていた。

一九世紀に入ると、光を感じて記録できる感光材料が出現する。撮影の開始である。一八二六年フランスのニエプス兄弟によって改良されたカメラ・オブスキュラは、アスファルトを感光材料にして撮影に成功する。しかしこれは撮影に八時間もかかるものだった。三十九年には同じくフランスのルイ・ダゲールが、銀メッキをほどこした銅板を感光材料とするダゲレオタイプという技術を開発。露出時間は三〇分にまで短縮された。これは現在の写真とは違って、感光された銅板自体が写真となり、一枚だけしか存在しない。つまり焼き増しができないものである。

四一年、イギリスのウィリアム・タルボットがこれを改良



80数年前のネガだが、反転するとききれいな画像が浮かび上がってきた。しかしガラス板は今にも割れそうで、買うのをためらってしまった

した「ネガポジ法」を開発する。現在の写真の原理の誕生である。撮影でまずネガ（印画）を作り、そのあとポジ（陽画）を作るという方法である。

五一年にはイギリスのフレデリック・スコット・アーチャーが写真湿板（湿板）を発明。ガラス板に塗られた感光材料は感度が高く、露光時間が大幅（一〇数秒）に短縮され、撮影しやすさもあつて写真の主流となる。七一年に、やはりイギリスのリチャード・リーチ・マドックスが写真乾板（乾板）を発明。湿板のように感光剤が湿っているうちに撮影する必要もなく、湿板よりもさらに感度が高いこともあつて短期間で湿板に取って代わった。

七八年には乾板の工業生産が始まり、ハンドカメラや瞬間シャッターの開発でアマチュア写真家も登場することになる。だが破損しやすいガラスに代わつて、八八年ニトロセルロースの写真フィルム、また何枚も巻き上げて撮影できるロールフィルムの登場で乾板の時代は終わる。

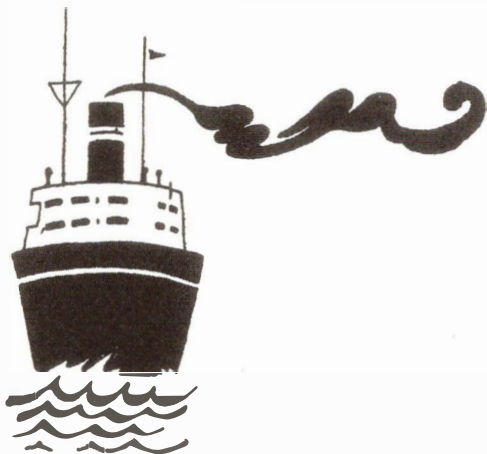
左上の写真は、不忍池の骨董市で見かけた乾板である。イギリスの写真用品メーカー、イルフォードの箱に何枚もの撮影済みのガラス板が収められていた。一枚手にとって撮影したのが少女を写したネガである。PCでポジに反転してみた。可愛らしい少女の姿が浮かび上がった。箱には「昭和五年七月ヨリ入」と書かれているから、一九三〇年以降ということになる。八八年のロールフィルムの登場で乾板の時代は終わると先に書いたが、その後四〇年以上まだ乾板は使われていたことになる。この乾板は一枚五〇〇円で売られていた。買おうかとも思ったのだが、割ってしまいそうで買わずに、店主に断って写真だけ撮らせてもらった。

浄土

2019/12月号 目次

法然上人と親鸞聖人②⑦	林田康順	2
連載 微風吹動	石田一裕	8
連載 江戸の川を歩く③③	森 清鑑	12
連載小説 渡辺海旭⑩②	前田和男	18
釈尊より法然へ④	頼住光子	26
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董 三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

【連載二十七】——いわゆる「悪人正機説」をめぐる——

林田 康順

（大正大学教授）

いわゆる「悪人正機説」をめぐる——親鸞聖人の理解——

前回、法然上人から親鸞聖人へ至る思想の成立過程について述べました。親鸞聖人によれば、自力の心でお念仏を相続している「疑心の善人」は「仏智疑惑の罪」を犯しているので方便化身・方便化土に位置づけられる有相の阿弥陀仏の来迎にあずかり、有相の莊嚴浄土に往生することに留まる一方、正しい信心を阿弥陀仏から賜っている「他力の悪人」は、真仏・真仏土に位置づけられる真の救いにあずかることとなります。言うまでもなくこうした考え方は、本連載で縷々紹介してきた三経差別門・三経一致門、あるいは、三願転入といった思想に基づいています。ここでいう「疑心の善人」や「他力の悪人」は、親鸞聖人の著作に散見されます。例えば、『正像末和讃』誠疑讃には次のようにあります。

罪福ふかく信じつつ 善本修習するひとは

疑心の善人なるゆゑに 方便化土にとまるなり（真宗聖典六一三）

（試訳） 罪惡を恐れて善根を修めるべきことを信じつつ、お念仏を相續している人は、阿弥陀仏の本願の働きに疑いの心をもった善人なので、方便化土に位置づけられる浄土にとどまってしまします。）

つまり、自力の心で善根を修める人を「善人」とし、その人は方便化土に留まると規定しています。続けて『歎異抄』第三には次のようにあります。

善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむところかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。（真宗聖典八三三）

（試訳） 善人でさえ浄土往生が叶うのですから、まして悪人が叶わないことはありません。ところが世間の人は、常に「悪人でさえ浄土往生が叶うのだから、まして善人が叶わないことはない」と言っています。こうした理解は一見もつともなようですが、本願他力の趣旨に反しています。なぜなら、自力で修めた善根によつて浄土往生を叶

えようとする人は、ひとえに阿弥陀仏のお力を信じる心が欠けているので、その本願に適っていないのです。しかし、そのような人であつても、自力の心をひるがえして、本願のお力を頼りにするならば、真実の浄土への往生が叶うのです。煩惱を断つことができない私達は、いかなる行を修めても生死を繰り返す迷いの世界を離れ出ることには叶わないので、阿弥陀仏はそうした私達をあわれに思われて念仏往生の本願を起こされたのであり、そのご本意は私達のような悪人を救い摂って成仏を遂げさせるためなのです。ですから、この本願のお力を頼りにするしかないという悪人の自覚こそ、まさに浄土往生の正しい因となるのです。こうした経緯を経て親鸞聖人は「善人でさえ浄土往生が叶うのですから、まして悪人が叶わないことはありません」と仰せになったのです。

つまり、「自力のこころをひるがへして」「他力をたのみたてまつる」「悪人」こそ「真実報土の往生」を遂げられると規定するのです。こうした親鸞聖人の一連の著作にみられる説示内容をあらためて整理すると次のようになります。

(疑心の) 善人⇨自力の心

↓方便化身土への往生

(他力の) 悪人⇨他力をたのむ心↓真仏土への往生

ちなみに、ここで引用した『歎異抄』の説示は、いわゆる「悪人正機説」と呼ばれ、これまで実に多くの方々がその思想に注目し、それこそ膨大な考察が加えられ、高い評価が与えられてきました。今回は、多くの読者からのリクエストもあり、いわゆる「悪人正機説」について考察したいと思います。

善人なおもて往生す、況や悪人をや―法然上人の理解―

近年、いわゆる「悪人正機説」は、貞慶の『地藏講式』など、各所に見出せる思想であることが広く指摘されています。書誌学的問題は残りますが、法然上人も、次の一節を『三心料簡および御法語』に遺されています。

善人なおもて往生す、況や悪人をや。（昭法全四五四）

法然上人は、この一節に続けて「菩薩・賢聖も之に付きて往生を求め、凡夫の善人も此の願に帰して往生を得」と菩薩や賢聖、凡夫の善人も浄土往生を目指していると述べる一方、平等救済の本願を起こされた阿弥陀仏にとつては、「他の方便」を持たない「極重の悪人」「罪惡の凡夫」こそが「此の他力を憑む可」き正機であると主張されます。そして、迦才の『浄土論』における「浄土宗の意は、本、凡夫の為にし、兼ねて聖人の為にせり」という一節を教証として引用します。このように法然上人にとって、いわゆる「悪人正機説」は、次のように整理できるのです。

善人Ⅱ（菩薩・賢聖・）凡夫の善人↓西方極樂浄土への往生

悪人Ⅱ

罪惡の凡夫↓西方極樂浄土への往生

つまり、上は菩薩・賢聖から、すべての善惡の凡夫に至るまで、本願念仏によつて阿弥陀仏の同じ浄土に等しく生まれることができるのであり、そこには阿弥陀仏の浄土を真化に隔てるような意図は決してありません。

ちなみに『一紙小消息』の中で法然上人は「自身は是煩惱具足せる凡夫なりとの給えり」（昭法全四九九）と述べ、「阿弥陀仏の化身として崇められた善導大師でさえ煩惱具足の凡

夫であると仰っている、いったい誰が「私は違う!」と言いきることなどできようか」とお示しです。だからこそ法然上人は、『念仏往生要義抄』の中で「世すでに末法になり、人みな悪人なり」(昭法全六八二)と述べ、末法の衆生はみな「悪人」であると受けとめたのです。このように法然上人にとって「悪人」とは、「お念仏を称えて阿弥陀仏にお救いいただく以外に道がない」という深い内省から生じてくる言葉なのです。

「いはんや悪人をや」の「いはんや」

法然上人と親鸞聖人のいわゆる「悪人正機説」は、その文言こそほぼ同じですが、その理解は根本的に相違しており、特に親鸞聖人の場合は善人と悪人が往生していく場所が異なっていることが知られます。その際、違和感を抱かざるを得ないのが「いはんや悪人をや」の「いはんや」の用法です。そもそも、古語・現代語を通じて「いはんや(いわんや)」は、「前の文の場合でもそうなるのだから、後の文の場合では言うまでもなくそうなる」という意味で、「まして」や「なおさら」などに置き換えられます。つまり、「いはんや」が用いられるには、前の文の結論と後の文の結論が等しいことが求められるのです。しかし、親鸞聖人の『歎異抄』に説かれる「善人なほもって往生をとぐ、いはんや悪人をや」の一節は、前述のように善人と悪人が往生する場が異なっているので、「善人でさえ方便化土に往生が叶うのです、いわんや、悪人が真仏土に往生が叶わないことなどありません」となってしまうのです。前後の説示内容を踏まえて、仮に置き換えが許されるのならば、「いはんや」ではなく、「一方」や「しかし」などといった接続詞の方が相応しいのではないでしょう。

罪人なお生まる、況や善人をや―阿弥陀仏が喜んでいただける日暮らしを―

前述のように法然上人は、いわゆる「悪人正機説」と呼ばれるご法語を遺しつつも、次の『一紙小消息』に説かれるようなご法語を多くお示しです。

罪人なお生まる、況や善人をや。（昭法全六八二）

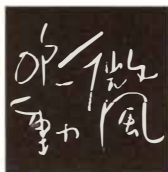
（試訳）悪業を犯してしまった罪人でさえ救いを求めてお念仏を称えれば浄土往生は叶うのです。ましてや、常にわが身を振り返りつつお念仏を相續し、あまつさえ仏道実践を心掛けている善人が浄土往生が叶わないはずはありません。）

なるほど、『念仏往生義』の中で法然上人が「たとへば父母の慈悲は、善き子をも悪しき子をも育めども、善き子をば悦び、悪しき子をば歎くがごとし。仏は一切衆生を哀れみて、善きをも悪しきをも渡し給へども、善人を見ては悦び、悪人を見ては悲しみ給へる也」（昭法全六九二）とお示しのように、私達は阿弥陀仏の大いなる慈悲を受けとめられたならば、煩惱を断ちがたいわが身であることを自覚しつつも、その御心を悲しませず、お喜びいただける日暮らしを心がけるようになることでしょう。このように法然上人にとって「善人」とは、この私をお救い下さる阿弥陀仏の御心に順じたいという切なる思いから現出してくる真摯な姿なのです。

以上、阿弥陀仏が私達の姿をいつも微笑んでご覧になりたいと願われていることをなんとかして伝えようと、「善人」や「罪人」「悪人」といった用語を使い分け、仏教者として、念仏者としてのあるべき姿を巧みに説示された法然上人の深い洞察にただただ敬服するばかりです。

（続く）

石田 一裕



微

風

吹

動

平成最後のお彼岸

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、
久しくとどまりたるためしなし。

鴨長明『方丈記』

令和元年九月九日、月曜日正午過ぎの品川駅は人が少なかった。新幹線を降り、在来線への乗り換え口を出て、横須賀線それから東海道線へと降りる階段口を横目に、JR浜松町駅に向かうため、山手線のホームを目指した。頭上の電光掲示板は、そこに映し出されるべき行き先や発車時刻を記すことなく、真っ黒なままだった。

駅構内の様子とは一変して、山手線のホームは人で溢れかえり、階段上での入場規制がかけられていた。眼下では内回り、外回りの電車が一本ずつ発車していき、混雑が解消されると、規制のロープが下ろされ、ホームへと降りることができた。やってきた電車は満員で、乗り込む列の後部にいた人は乗車を諦めていた。都内で動いている電車が少なく、移動手段が限られていたためであろう。

電車は所々で徐行しながら浜松町に到着した。北口改札を出て歩を進めたが、眼前に「こちらが最後尾です」という看板を持った人がいた。それはモノレールに乗るため人々が並ぶ列の最後尾だった。モノレール浜松町駅のホームは五階にあるが、電車に乗るための列はホームに収まらず、改札を超え、外にまで連なったのである。

その列の脇を通り過ぎ、増上寺へと向かった。普段なら昼食時で賑わうオフィス街の活気が感じられず、九月らしからぬ真夏の日差しが、ジリジリと

コンクリートを焦がしていた。

電車の混雑も、街の活気のなさも、真夏の暑さも、九月九日早朝に上陸し、千葉県を中心に甚大な被害をもたらした台風十五号の影響である。関東地方を襲った強風は鉄道網を破壊し、通勤客に大きな混乱を引き起こした。当日、この交通の乱れ以外の被害はさほど報道されることはなかった。翌朝、電車の時刻はまだ乱れたままであったが、都内は平常を取り戻したように思えた。しかしながら、SNSや知人の連絡を介して、千葉県にかなりの被害が出ていることがわかってきた。仲間と共に現地に入ることが決定した。

九月十一日午前七時に数名で東京を出発し、アクアラインを通って、南房総市に入った。被害の様は車の中からでもはっきりと理解できた。灯つていない信号、吹き飛んだ瓦、家屋の損壊も目に入ってきた。途中、道端のコンビニが目にとまり、駐車場に車を止めた。入り口は閉ざされていたが、ガラス越しから、店内の様子を見て取ることができた。停電で明かりがないにもかかわらず、強い日差しが店内を照らしていた。屋根が吹き飛んでいたのだ。棚が倒れ商品が飛散したその光景は、暴風雨を受けたことを鮮烈に示していた。被害を受けたいくつかの寺院に訪問したが、道端のコンビニと同じ光景であった。ある寺院は本堂の屋根の瓦が崩れ落ち、あたりに飛び散っていた。

本堂内の漆喰が塗られた壁には茶色い水の跡が残されていた。別の寺院では、本堂の屋根が半分以上吹き飛び、堂内から青空を見上げることができた。鐘楼が崩れ落ち、庫裏の外壁が吹き飛ばされた寺院もあった。

二つの寺院で、仲間と共に屋根に上り、台風一過の強い日差しが照り付ける中で、ブルーシートを張った。ひと段落すると、被災した寺院の人々は、作業に対する感謝の言葉と共に、九日未明に感じた恐怖を伝えてくれた。暴風が吹き付ける音、瓦が吹き飛び割れる音、崩れる音、その中で眠れぬ一夜であったことも。

風が人々を襲い、恐怖を与えることは昔からの習いであった。

『方丈記』は治承四年（一一八〇）に京都を襲った辻風によって、家屋の屋根が風に舞う木の葉のように飛び散り、数えきれないほどのけが人が出たことを記している。この風は多くの人を嘆き悲しませたのだ。作者の鴨長明は、その被害からであろう、この辻風を地獄の風に例えた。地獄に落ちた人々を苦しめるような風が、この世にも吹き荒れたのである。

長明はそのような光景を目の当たりにし、無常を感じ取った。しかし、無常ゆえに地獄のような風もいつまでも続くわけではない。いずれ穏やかな風が吹く時が来る。水面の泡が久しく止まらないように。

江戸の川 を歩く

第三十三回

江戸ウォーカー

森清鑑

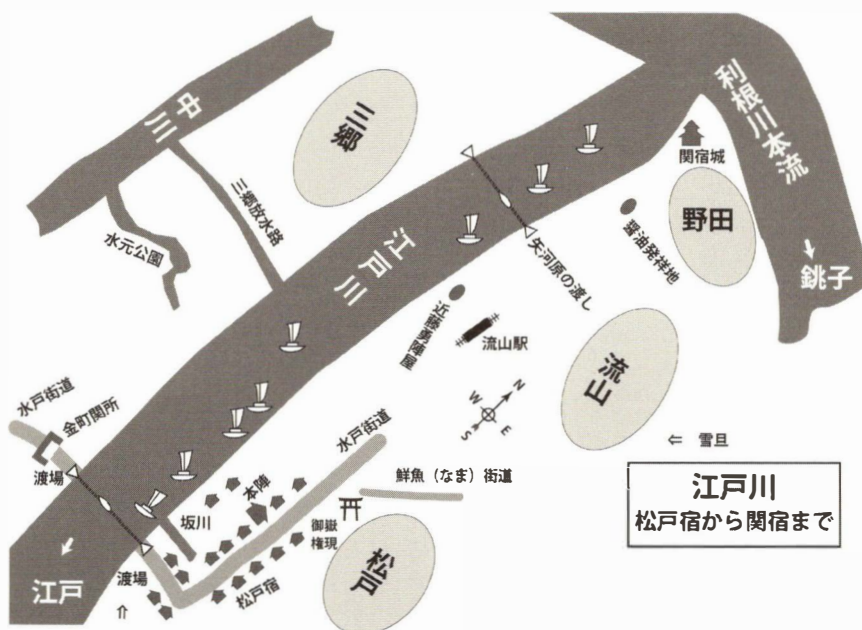
江戸川(利根川)「4」 松戸から関宿まで

せきやと

舟に乗って矢切の渡しから江戸川を終点の関宿まで北上しよう。右を見ると松戸側の矢切の渡し場。左を見ると、江戸側の矢切の渡し。柴又。江戸川は滔々たる流れ。多くの帆船が運航している。周囲は茫洋とした田園の風景。広々としている。

葛西神社

左側、柴又の民家が遠くなると江戸川沿いに一陣の森。その中に格式ある葛西神社がある。この神社、平安末期の創建で柴又を含む、広範囲の総鎮守社である。しかしそれ以上の驚きはこの神社が「祭り囃し」の発祥地であることだ。なんと、江戸時代に当社の祭り囃子が、江戸中枢の神田明



神に伝わり、江戸中に広まっていったというのである。今日、我々がこの祭りでも聴く、祭り囃子は実は此処から始まったらしい。

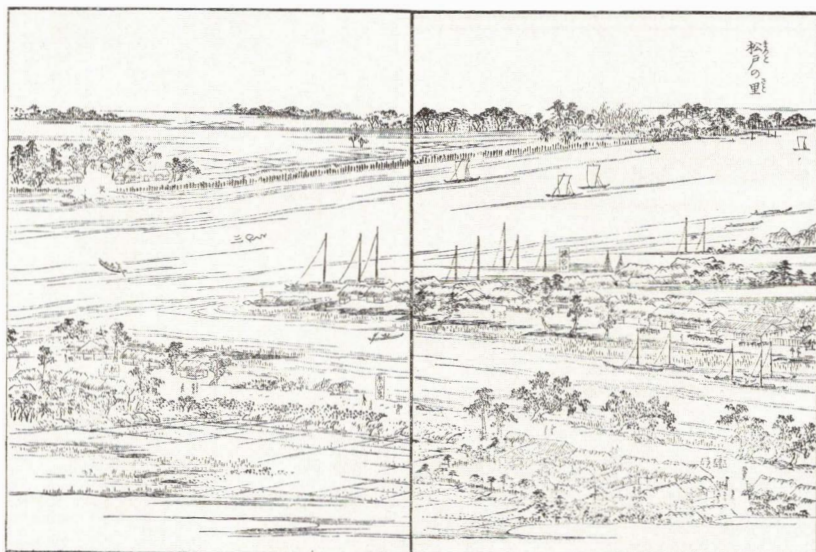
松戸宿

江戸川をさらに北上。すると次の渡しが見える。左の渡し場が金町側、右が松戸である。水戸街道を繋ぐ渡し。金町関所で厳しいチェックを受けた旅人は渡し船に乗り、対岸の松戸宿に到着。降りると狭い街道を東に直進。すぐに九十度曲がって北に行く（江戸川にそって。現在の松戸駅の西）。道幅も広くなり、両側には宿がびっしり並ぶ。松戸宿は水戸街道、千住から二つ目の宿場となる。大名も旅人も必ず松戸宿に泊まるから賑わいも想像できる。元禄十二年には松戸宿は天領になり、本陣、脇本陣各一軒、旅籠二十八軒が軒を並べた。雪旦の「松戸の里」を見よう。雪旦は松戸宿の江戸川沿いを描いている。多数の大型帆船が帆を畳み停泊している。大きな荷揚げ河岸があちこち

に見られる。松戸は利根川と江戸川を使って大量の物資を江戸に運ぶ中継点であった。左上に江戸側、金町の関所、渡し場が描かれ、一艘の渡し船が松戸宿に向かって走っている。行き着く先は下横町渡船場だ。降りると絵の下に描かれている水戸街道の土手道を歩く。いろんな人の姿。道の両側に立ち並ぶ家々。途中「本河岸」の明示がある。江戸川沿いに幾つもの河岸があり、船が停泊している。この道の前は江戸川に注ぐ川が描かれている。これが坂川で物資運搬の運河。松戸宿を横切っていた。雪旦の絵は、松戸宿が船運の町であることを如実に伝えている。坂川にも帆船が入り込んで停泊している。雪旦の絵はここまでだがこれから先、水戸街道は、くの字に曲がり、江戸川に沿って北に転じる。そして宿の中央部分に豪華な本陣がある。水戸徳川藩士が常用するだけでなく土浦藩、笠間藩、平藩、相馬藩など十数藩が参勤交代の折、利用した。本陣の近くに御嶽権現（松戸神社）があるが、水戸光圀公が崇拝した権現社で徳川水戸が松戸をいかに重要視していたかが、分か

る。それも皆、利根川、江戸川の船運を一手に引き受けている松戸宿の実態にある。船運業による今日では考えられぬほどの繁栄があった。宿場にみちびき不動尊が立っているが、これは成田山参詣の道しるべと街道を行く旅人の安全を祈願して船運業の人を中心に処の人々が協力して立てたものである。松戸宿には当然、遊郭もあった。これは特に船乗り達をもてなす女性を置いていた。

松戸の近辺に鮮魚街道の標示が見受けられる。これは銚子沖で獲れた鮮魚を布佐（我孫子市）で陸揚げし馬でここに運ぶ道のこと、松戸に集められた鮮魚はここで再び船に積まれ、江戸川を使つて、日本橋に送ったのである。しかし、特に夏、陸路は傷みやすいので銚子から利根川本流、関宿から江戸川下りで日本橋に運搬の主コースが使われる。ともかく家康が利根川の東遷事業を行い、東北からの膨大な物資、海産物の運搬路を完成させたことは、江戸の繁栄に直接寄与したのである。松戸はその象徴的存在であつた。



雪旦：江戸名所図会：「松戸の里」：上に沿々と流れる江戸川（利根川と書いてある）。左上対岸の金町関所から左下、船着き場に向かう渡し船、下に水戸街道が描かれ、その上に、横に流れる川が坂川。此処にも船が入り込んでいる。全体に沢山の大型船が停泊。船運業で栄えた松戸の雰囲気を感じられる。

流山

松戸を越すと流山である。見渡す限りの農地、山林。石器時代から人が住み、縄文期には東京湾の水位が上がっていたので海辺となり貝塚が多数発見され、奈良時代には製鉄の跡も見られる。江戸時代は幕府の軍用馬名産地。白みりんの一大産地で、江戸川經由で江戸はおるか関西まで積み荷された。幕府は教育にも力を入れ寺子屋も多く、小林一茶も訪ねている。流山といえ幕末、新撰組の陣屋があつたことで知られる。官軍に追われてきた新撰組がこの陣屋（流山駅と江戸川の中間）に集結。しかし、官軍の流山焼き討ちを危惧した近藤勇は自首、板橋の小塚原刑場の露と消え、こゝで分かれた土方歳三は翌月、函館五稜郭で戦死する。

江戸川、松戸、流山の対岸は、三郷。^{みぎと}廣大、肥沃な農地。流山と同じく早稲米で有名であつた。江戸期には何十という農村の集合体。今日、広大な水元公園や三郷放水路は、いずれも、お隣の中

川と江戸川を結ぶ形でできているが、家康が利根川東遷する前の流れは、利根川本流であり、網の目のような流れになっていたことを想像させるものである。

野田

江戸川（利根川）をどんどん北上する。松戸、流山が江戸川に沿って広大だが細長い地形。それを過ぎると利根川本流まで東にも広がっている地形の野田。野田と言え江戸時代も今も醤油の町。家康が江戸入府する一五九〇年の二十年前、飯田市郎兵衛の先祖が溜醤油の生産を始め、武田信玄に納めたといわれる。一六六一年高梨兵左衛門という人が本格的な醤油の醸造を開始。翌年、茂木七左衛門が味噌の醸造を始め、後に醤油醸造。これら一族が中心となつて野田の醤油を盛り上げてきた。何と言つても江戸が広大な都市になるにつれ、野田の醤油は爆発的な成長を遂げる。なにしろ江戸川を通じて直接江戸に流通され消費される

のだから。しかし、何故、野田が醤油生産の最適地になったのか。醤油の原材料は大豆、小麦、食塩である。大豆は利根川北の茨城が、小麦は利根川沿いの埼玉、群馬が名産地なのである。これらは利根川を通じて収集できる。もう一つの塩は何と言っても行徳があるではないか。すなわち、野田の醤油は利根川水系が生んだ産物なのである。

せきやど

関宿

野田の先端、すなわち江戸川が利根川本流とぶつかるところに関宿はある。ここには関宿城がある。ここは戦国時代には、関東の中心部とされ、上杉、北条のバトルが繰り返されてきたところである。関東の制圧を目論む北条氏康は「この地を押さえる」とまで述べている。何しろ利根川は関宿から江戸湾に向かっていたのだから。結果、氏康と氏政、氏照親子が上杉謙信の支援を受け、関宿城を守る築田晴助を三度の攻撃で落とす（関宿

合戦）。こうして北条氏が関東の制圧に成功した。特に注目されるのは氏照で利根川の水運に着目、様々な開拓に着手している。後に彼は八王子城の主として江戸一円に目を配る。しかし、秀吉の小田原城攻撃が始まり、小田原に駆けつけ、結局氏政、氏照とも割腹。八王子城は炎上。そして家康の江戸入府となる。江戸を含む関東の人々は北条の善政（年貢の低減など）に気を良くしていたらしく、その意味で家康はやりにくかったのではないかと思われる節もあるが、彼は数十倍の画期的政策で関東の人々を豊かにしたのである。関宿城は関宿藩の藩庁として家康の異父弟、松平康元の居城となり、その後は久世家が代々藩主を次いでいる。関宿といえは、太平洋戦争を終結に導いた鈴木貫太郎首相の出身地。彼はここから海軍兵学校を受験し、日露戦争を経て海軍大将になった人で、現在、関宿の生家は記念館になっている。

（つづく）

●小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第一〇二回

第三部

充実と稔りの白秋へ

澁沢栄一との謎にみちた親交 その一



洪沢が一万円札なら 海旭を千円札の顔にせよ

のっけから、いささか刺激的な小見出しをもって「脇道」へ入ることを（といっても最終的には「本筋」につながるの）で）ご寛恕いただきたい。

本年も暮れへと向かうなか、鳴り物入りで始まった大河ドラマ「いだてん」も、さしたる視聴率をとれずに大団円を迎える気配である。来年の大河のモデルは明智光秀だそうだが、おそらく国民あげてのオリンピック騒ぎの蔭に隠れてしまうであろう。

となると、「紅白」とならぶわが公共放送の看板番組が二年連続の低視聴率で、もはや公共的値打ちをもつ国民的テレビ番組とはいえなくなる。NHKとしては、それをおそれるか、二年以上も前から「次々回の大河のモデルに日本資本主義の父、洪沢栄一をとりあげる」（「青天を衝け」）と発表、また、マス

コミも、洪沢が「新一万円札の顔」になるという、これまた四年も先の話とつなげて、こぞって盛り上げに全面協力をしている。ここまできると、はるか上の筋からの思惑が働いているのではないかと下種の勘繰りもしたくなる。

しかし、そこへ批判や揶揄の矛先を向けようというのではない。むしろ逆である。

これを奇貨として、わが渡辺海旭を売り出すまたとないチャンスが到来したのではないかと妄想するのである。できることなら、「大河」では海旭を脇役の一人に起用してもらい、さらには、洪沢が「一万円札の顔」なら、海旭を五千円は無理でも「千円の顔」にしてもええないだろうか、と。

実は、洪沢栄一と渡辺海旭との関係はほとんど知られていない。唯一の手がかりとなるのは、海旭の弟子たちによって死後編まれた『壺月全集』に掲載されている一枚の写真である（★写真1）。写真下には「大正五年六

月三日国士館に於いて 前列向って右より徳富蘇峰氏、故澁澤栄一氏、故野田卯太郎氏、頭山満氏 後列柴田徳次郎氏 故人（渡辺海旭）と記されているのみで、同書のなかで、その経緯について、海旭本人はもちろん関係者は何も書き残していない。また、洪沢と海旭の仲介者とされる頭山満も同様である。

洪沢史料館で新たな手がかりを発掘

したがって、わが妄想をもつてしても、二人の関係を「見てきたように」描くのはさすがに難しい、適当にお茶を濁すしかないと諦めていたところ、中学・高校・大学の先輩である間部俊明弁護士より、「洪沢栄一の研究者から洪沢の史料館にいけば手がかりがあるとの示唆をうけた」との連絡をいただき、一緒に同館を訪れることにした。洪沢が王子製紙を興した飛鳥山の近くにあった広大な洪沢の旧私邸跡に建てられたもので、折しもリニューアルのため半年間の閉館直前にぎりぎ



前列の右から2番目が洪沢栄一、後列の右から2番目が渡辺海旭（国士館大学にて）



史料館に佇む渋沢栄一の像

り間に合った。
個人の史料館に五人もの学芸員がいるのには、さすが一万円札の顔になるだけの歴史上の大立者だとびつくりしたが、もっとびつくりしたというよりがっかりさせられたのは、学芸員たちが「渡辺海旭との関係」はもとより、そもそも「渡辺海旭の事績」をまったく知らないことだった。（★写真2、3）
しかし、ありがたいことに、五十巻にも及ぶ膨大な資料がデジタル化されており、「渡



渋沢栄一史料館

辺海旭」で検索をかけたところ三十近くがヒット。それを手がかりに原典にあたると、二人の関係をつぶさに伝える貴重な資料を掘り起こすことができた。

とりあえず関連箇所をコピー、まだすべてに目を通し終えてはいないが、海旭は何度か洪沢邸を直接訪ねており、いっぽう洪沢は海旭が関連する団体（宗門関係だけでなく、社会事業、日印（日本印度）協会など）の集まりに呼ばれて一席ぶったりしているのである。これらからも、二人が半端な関係ではないことが理解されるだろう。

さらに、これは三文文士の直感だが、これだけの付き合いがありながら、当人たちはもとより、関係者が何も書き残していないというのは、なんとも怪しい、ここにはなにか、歴史的な暗号が隠されているのではないか。まさに妄想の働かせ甲斐があるというものだ。

前口上がかくも長々しくなって恐縮至極だ

が、というわけで、今回からしばらくは、「渡辺海旭と洪沢栄一との謎にみちた親交」について、新たな史料にも拠りながら、大いに妄想を働かせて、ひもといてみたい。

あわせて、来年からしばらくは百五十年の時を超えて、時の人となるだろう洪沢栄一翁をめぐる「とっておきのエピソード」を、「月刊浄土」の読者にだけこっそりお知らせをしたい。

「三教会同」と同工異曲の「帰一協会」

さて、前号で記したように、明治から大正への御代替わり直前に、「三教会同」、すなわち仏教、キリスト教、神道の「三教派」を融和させようとする動きが政府から日本の宗教界に突然ふっておりてきた。

海旭がドイツから帰国してわずか二年たらずの明治四十五年（一九一二）二月のことである。

これに対して海旭は、「内務省をつかった

宗教の利用」との警戒心をいだきつつ、表だって全否定はしないものの「時期尚早」の論陣を、主筆をつとめる宗門の機関紙で張って、これを退けた。「三教会同」は浄土真宗東本願寺派の不賛同・不参加もあって尻つばみにおわり、海旭も安堵をしたが、それは束の間のことだった。

それから四か月後の同年六月、「婦一協会」なる団体が立ち上がるのである。「階級・国民・人種、宗教の婦一」を標榜、諸宗教・道徳が同一の目的に向かって協力しあうことを期したもので、「三教会同」と同工異曲の内容である。この「婦一協会」は準備会が洪沢邸でもたれ、運営費に洪沢が年間千円の大金（現在の貨幣価値で二千万円）を寄付したことから、「婦一協会」が「三教会同」と連携しており、この一連の主唱者が洪沢であったことは明らかであった。また、洪沢の背後に控えるイデオログは、海旭の畏友でもあった東大宗教学の姉崎正治であった。

江原素六や新渡戸稲造、さらに有力外国人宣教師たちも会員に名を連ねていた。

「富豪が今なすべきは救貧の実践である」

この婦一協会の動きが明らかになると、海旭は「現代富豪に望む」の見出しを掲げ、「三教会同」のときよりも激しい調子でかみついたのである。ここには洪沢の「し」の字も、姉崎の「あ」の字もないが、当時の読者は、「富豪」の主導者が洪沢栄一であり、「講壇宗教家」たちの筆頭が当時東大教授であった姉崎正治であることは容易に推しがついたはずである。なお、往時から百年後のわが読者のために、海旭一流の修辭がわかるように（ ）で補った。

概要は以下のとおりである。（明治四十五年七月、『壺月全集』下巻、一八九ページ）

「最近、二三の富豪が、現代思想が混迷をきわめるなか、講壇宗教家と提携し、宗教研究

をもつて民心をまとめるようにする動きがある。我が国の富豪たちは豪邸や珍玩奇什を愛で、民心のことなど牛馬でいどにしか思わないことにくらべると、大いに評価すべきである。

しかしながら、彼らには、この遠大なる挙を為す前にやる必要があるのではなからうか。宗教（の統一）を云々する前に、まずは自身が宗教的な実践をすることで宗教を体感することである。

その宗教・宗派はなんでもよい。

禪寺で痛棒を三百回受けるもよし、密教の秘法をするもよし、耶蘇の神の子となって天国の門を窺うもよし。民心をどう帰着させる（まとめる）べきかを議論する前に、自身の心の帰着を定めるべきである。そうでないと、黄金をもつて学者を釣り寄せ、世間の評価を買収せんとする動きとなるであらう。

その前に富豪たちがなすべきことがもう一つある。困窮者へ手を差し伸べることである。

それは慈善団体の顧問に名を連ねることではない。（洪沢の日赤との関係を皮肉っている）国民は富豪によって一部の哲学者と宗教家を得ること（婦一協会のこと）を望んでいない。彼らの切望は真の救済事業で実を上げることである。いまだこの国には一条の「救貧法」すらない。富豪たちが今なすべきは、便佻巧言の宗教家を饗応して空言高談にふけるよりも、一片の愛蔵品を売却して、（海旭が「労働共済会」でやっているような）無料浴場を建て、一夕の食事の炊き出しをすることではなからうか。

富豪たちが夢想する、（宗教の統一による）危険思想の防止は、むしろこうした実践によってなされるのであり、断じて『思想（宗教）統一』によってではない」

もし洪沢が、この海旭の論評を目にしたら、その筆先の鋭さに、驚き、大いに戸惑ったことだろう。

第一国立銀行（現在のみずほ銀行）、王子製紙や東京瓦斯など今も日本経済の屋台骨を支える会社を生涯で五百以上も立ち上げた洪沢は、すでに古稀を迎えて実業の第一線から退きつつあり、残りの人生の重心を救貧活動などの社会貢献に傾注していた。片や海旭はというと、留学先のドイツでの体験・知見から、宗教は社会のためになればならないとの信念のもと、浄土宗労働共済会を立ち上げ、社会事業の取り組みに燃えていた。

ふつうに考えれば、互いを理解しあっても不思議はなかった。それがなぜこれほど敵対的になるのか、それも三十近くも年下が一方的な指弾に終始するのか。

これは筆者の妄想だが、元老たちと同様、洪沢も明治維新をもって日本を近代国家につくりあげたとの自負をもっており、権力の中枢にいたがゆえに、明治という「自分たちの時代」が終り、初めての「御代替わり」がおきることをあらかじめ知っていて、日本の先

行きに大いに不安を抱いていたのではないか。唐突とも思える「三教会同」が尻つぼみになるや、洪沢が「帰一協会」をぶちあげたのには、そうした背景があったからではなかったか、おそらく、十年以上も故国を離れて帰国したばかりの海旭には、「御代替わり」の意味が、この時点では十分にはわかっていなかった。

しかし、後に二人が急接近するのは、その意味に海旭がおくればせながら気づいたからではなかったろうか。

それは、今回の資料でわかったことだが、それから五年後の大正五年、東京仏教護国団の結成に渡辺海旭が深くかわることが大いに関係していたと思われる。

（つづく）

釈尊より 法然へ

大乘仏教における浄土宗

法然上人鑽仰会 講演概録

4

東京大学教授

頼住光子

⑦「念仏」

良忠によりますと、法然は初対面の弁長に、念仏というのは三つの種類があると言ったと伝えられています。それは、①摩訶止観の念仏、②往生要集の念仏、③善導勸化の念仏の三つです。この①摩訶止観の念仏というのは、止観の助業として口称念仏を行うものです。あくまでも止観の助業であるというところに特徴がございました。②往生要集の念仏というのは何かといいますと、これは口称念仏と観想念仏の双修ということであります。基本的に天台宗の念仏というのは①と②ということで、先ほど法然が若いころ天台浄土教を勉強したと言いましたが、これは①、②という天台浄土教を学んだということです。それから、奈良に行って、南都の浄土教なども勉強したと言われています。その次の③ですけれども、これは善導勸化の念仏ということで、まさに法然が影響を受けた称名の一行を阿弥陀仏の本願に誓われたものとするという意味での念仏ということで、これがまさに「専修念仏」ということになります。

専修念仏

専修念仏として法然が主張するのは、口で阿弥陀仏の名号を称える口称念仏ということになります。善導自身は、先ほど申し上げましたけれども、口称念仏と同様に、精神集中して阿弥陀仏や、またその浄土のありさまに思いを凝らす観想念仏も非常に重んじていたのですが、法然は、勝行であり、易行であって低下の凡夫でも修することが可能な口称念仏以外の念仏をとりあえず排して、ただ口称念仏のみによって、凡夫は凡夫のままに往生できるのだということを主張しました。そして、善導を「専修念仏の導師」、先駆者と

呼んでおります。

この法然の専修念仏説の特徴を六つ挙げてみました。これは大切だと思いますので、確認したいと思います。

- ①「本願に基づく称名」ということで、これは阿弥陀仏が、念仏する全ての者を浄土に往生させようと誓願を立ててくださったことに基づく念仏であったということです。
- ②「称名を正定業とする」ということで、口称念仏こそが本願に誓われた正定業であり、それ以外の読誦、観察、礼拝、讃歎供養などは助業にすぎないという考え方です。
- ③「称名の易行性」ということで、念仏は末世を生きる低下の凡夫にも適合した時機相應の教えであり、一切衆生が救われる易行であると考えられています。この易行については、先ほども言いましたように、気楽にできるということでは全くなくて、どんな悪人でもできるという意味での易行と理解するべきだと思います。
- ④「念仏の勝行性」ということで、念仏はほかの行に超えすぐれ、全ての功德がこもっているといわれます。だから、どんな悪人でも念仏すれば救済されるという考え方がです。

⑤念仏の相続ということ、これも非常に重要だと思うのです。一回の念仏でももちろん救われます。先ほど言いましたように、下品下生の大悪人が、自分の臨終のときに、最後にたった一回でも称えれば救われるのです。けれども一回、称えればそれでいいということではもちろんなくて、先ほど言いましたように、二河白道の道をスタートしたというのが最初の一回目の念仏ですので、二河白道を歩み続ける中で称え続けるということになります。ちなみに、法然上人ご自身は日に六万遍、称え、弟子たちに

も、称えなさいと勧めていたということです。一回でも救われるということと、称え続けるということは、これは別に矛盾することでもなくて、二河白道のスタート地点とゴール地点という先ほどのお話で、その間が短くても長くても救われるということです。ですから、一回でもいいし、何十万遍でも構わないということになるのだと思います。一回も何十万何百万遍も同じだということになっていくと思います。

⑥三心具足の念仏ということで、三心といいますのは、念仏者が起こすべき三つの心、至誠心、深心、廻向発願心で、これは最終的には一心に収斂します。それを具足した念仏によって往生することになります。さらに法然は念仏しているうちに三心が具わるとも言います。これはどちらかだけではなくて、両方必要だと思うのです。念仏を始めて三心が具わるということであり、三心があるからこそ念仏が称えられる。これは矛盾することではなくて、自分が念仏をしたときに、自分には三心が備わっていた、三心というものが自分の中であつたと自覚されてくるということではないかと思えます。

他力の念仏

他力念仏といいますのは、阿弥陀仏の本願他力を頼んで称える念仏ということで、これによって往生へと導かれる念仏のことです。法然上人は、あくまでも他力によって往生へと導かれるのであって、みずからの力によって往生できるのではないとおっしゃいます。このことが『選択集』の中ではっきりと書かれていると思います。また、『七箇条の起請文』(『和語灯録』巻二)の中にも他力念仏についてはっきりと言葉が残されていて、「他力をた

の「みたる心」で念仏を称えよと言われております。

一念と多念

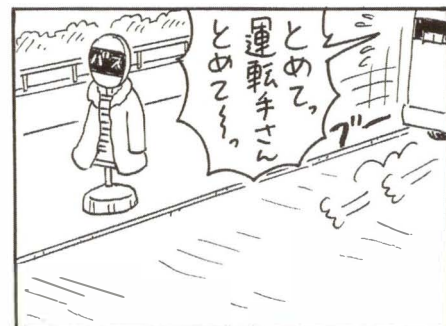
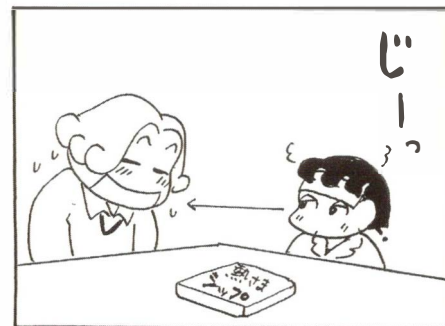
一念というのは、浄土教においては、①極めて短い時間の単位、②観想念仏において一つの思念、③一声の念仏という意味で捉えられるのですが、『無量寿経』の願成就の文の中の一念をよりどころといたしまして、法然は善導などにならしまして、一念を「一声」として理解して、念仏の一声と解釈していったところと、ここに大きな特徴があります。要するに、念仏を一声でも称えれば救われるのだけれども、一声、称えて、それでおしまいということではなくて、先ほど言いましたように、二河白道を歩み始めたというその最初の一步が一念で、歩み続けていくというのが多念ですから、一念と多念というのはもちろんつながっているということになります。

念仏の中の生活

法然は、これは『選択集』の中というよりも、『禅勝房伝説の詞』の中に書かれているのですが、「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし」ということで、要するに、生活はどういう生活でもいいから、とにかくあなたにとつて念仏を称えやすいような生活をしなさいということです。例えば、奥さんがいたほうがいい人は奥さんを持てばいいし、奥さんを持たないで独身で念仏したほうがいい人はそうしなさいということで、全てが念仏を中心として生活するということです。生活の中に念仏があるというよりも、念仏の中に生活がある、生活全てを念仏中心にしなさいということを言っています。（つづく）

さっちゃんはネ...

かまち♡ふらう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

新聞・山梨日日新聞・北

編集後記

掃く程にこころ鎮まる年の暮れ 岱潤

今年もまた大きな災害がつづき、未だに不自由な生活をされている方も多いとお聞きます。地震だけではなく、台風という風雨による被害は、新たな避難所の問題も出てきたようです。

昔は災害や国難が訪れると、神社や寺を掃除するようにという詔が出されたそうです。そうした聖域が汚れている、本来あるべき姿でないと、秩序が失われた状態だから災いが起こる。そう思われていたからそうです。

『蓮門住持訓』に言われるまでもなく、第一清掃、第二勤行と、我々僧侶の日常

は、勤行よりも掃除に重きを置かなければなりません。禪宗では掃除は坐禅と同じ修行だとします。自分の坐禅を他の人がやったのでは意味がないように、掃除も他の人がやったのではだめなのです。

だから「一日なさざれば、一日食らわず」という言葉が出たのです。ときどき九〇歳近い当会の佐藤会長にお電話すると、「今墓地の草取りやっています」というお話を聴きます。さすがだなあと感心させられます。

さあ今年も年の暮れ、釈尊の弟子のひとり周利槃特はんとくではありませんが、「ちりを払おう、垢を除こう」のかけ声よろしく、我々僧侶は毎朝の掃除に一層精を出

そうではありませんか。

「お寺が汚れているから、災害が起こるんだよ」などと言われないように、毎日やるのが肝心なようです。なぜなら掃除は、汚れたからするのではなく、こころを磨く修行だからです。(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻十二月号 頒価六百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年十一月二十日

発行 令和元年十二月一日

発行人

編集人

印刷所

株式会社

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多将敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

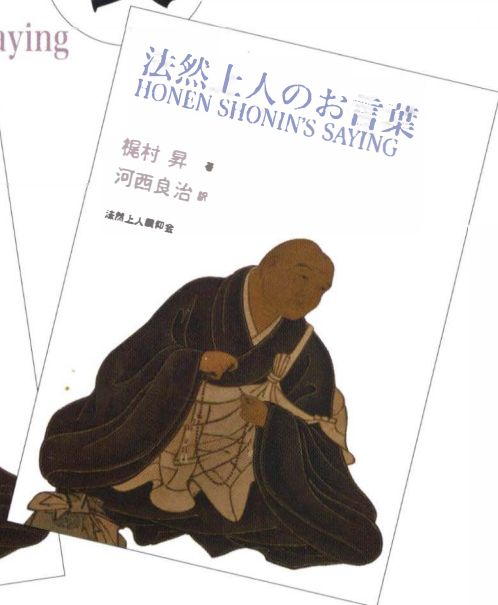
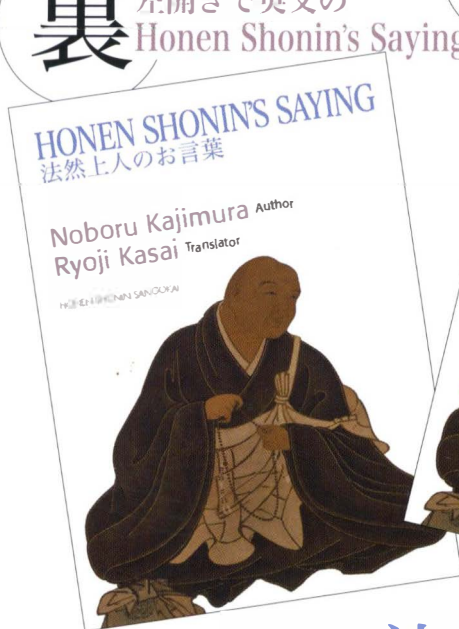
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人顕仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏 左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表 右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人顕仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人顕仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。